

コウノトリ湿地ネットニュースレター



7号 2010年1月1日発行
コウノトリ湿地ネット
豊岡市城崎町今津1362
電話 0796-20-8560



こどもと、おばあちゃんとコウノトリ

.....
新年おめでとうございます。

パタパタ創刊から1年を迎えることができました。この1年の中で、戸島湿地が開設し、湿地ネットの活動も、本格的な段階となってきました。さまざまな課題も明らかとなり、湿地ネットは取り組むべき目標に向かい、今年も全力を尽くす決意です。会員、賛同者の皆様の、ご協力をよろしく願いたします。

昨年は、10月から11月にかけて円山川で、落ちアユを食べにくるコウノトリの姿が見られました。今までも、数羽が来てはいたようですが、昨年は、10数羽の群れとなって、落ちアユを食べる姿が、1ヶ月あまり見られました。放鳥から5年を経て、コウノトリたちの行動に変化が出てきているのではないかと思います。

さまざまな環境を利用し、たくましく生きていくコウノトリたち。私たちが遅れをとることはできません。コウノトリたちに励まされながら、今年もがんばっていきましょう！
(パタパタ編集部)



▲アユを食べに夢川大橋下流に集まるコウノトリ



今年も、湿地づくりを続けます

新しい年を迎え、本紙「パタパタ」も2年目に入りました。この1年の活動を振り返り、コウノリが息で
きる湿地の再生状況と野生復帰の方向性について、2回にわたって述べてみたいと思います。

コウノリ湿地ネット副代表 佐竹節夫

自然生態系の再生はやっぱり難しい、だから
面白いんだけど

2009年の目玉は、「市立ハチゴロウの戸島湿地」
のオープンと田結地区の放棄田再生の取り組みで
した。(田結地区は次号で)

戸島湿地では、1月から指定管理者となったの
で4月のオープン1ヶ月前から常勤職員を配し、施
設管理とコウノリの餌場づくりにまい進してきま
した。「工事が完成した施設」は自然の土台ができた
に過ぎず、オープン直後から生きものを増やし、コ
ウノリの良好な採餌環境づくりに追われました。

オープン直後の4月中旬、湿地の地盤は全面土
ばかりのところ、わずかにキンポウゲ科の植物が
顔を出し、そのタイミングに合わせてコイが多数遡
上してきました。彼らは起伏ゲートを昇り、草の元
で産卵行為を繰り返します。そのダイナミックな光
景に生きもの世界の力強さを感じ、本川とつなが
った湿地ができたことを本当に嬉しく思ったもの
です。

この頃は、人工巣塔ではコウノリのヒナがふ化し
ており、来場者の関心はヒナに向けられていま
したが、カワセミという新たなスターも登場しま
した。つがいが毎日やって来て、せっせとダイブし小魚を捕
まえるシーンはとても魅力的で、カメラマンたちを
釘付けにしたものです。(この光景は今も変わりま
せん) 湿地には止まる木がなかったので、小枝と
杭を数本立ててプレゼントしました。汽水域の地盤
はミニ干潟となり、コチドリがやって来て管理道の
碎石に産卵していました。

まずまずのスタートに安堵したのも束の間、6月中
旬から草との戦いが始まるのですが、これについて

は、別項で宮村理事が書いていますので、ここ
では省略します。

戸島湿地の「売り」は山～溪流～湿地～川・海が
つながっていることです。看板どおりにさまざまな生
きものが出入りしたり再生産を繰り返す「生態系
の見本市」となっているか？ これまでの調査では、
魚類ではメダカ、フナ、コイ、アユ、ナマズ、ボラ、
ハゼ、ウナギなどの種が雑多に確認されており、
“看板に偽りなし”と言えるでしょう。しかし、自然は
人間の都合よく「好ましいもの」ばかりを受け入れて
くれません。ウシガエル、カダヤシ、ブルーギルな
ど「歓迎しないもの」も入り込んできました。そのた
め、ブルーギルは円山川漁協から罟を借りて捕獲
し、コウノリの給餌用にも供しています。

ともかく、豊岡市初の大規模人工湿地は、在来、
外来を問わず湿地性生物から熱烈歓迎を受けた
ことは間違いのないようです。



汽水域に仕掛けた定置網

肝心のコウノリの餌場になっているか？

残念ながら、答えは現在に至るもNOです。日常
的に魚を捕まえ、食しているのはサギ各種、カワセ

ミ、カワウで、コウノリはほとんど採餌できていません。湿地内水路(深み)にたくさん入り込んでいる餌生物を浅瀬に誘導し、コウノリが容易に採食できる環境にしていくため、オープン以降、次のとおり湿地地盤を少しずつ修繕してきました。

- ①浅瀬が全てフラットになっているので、スコップで掘って窪地(小さな池)や小区画の囲い、魚類移動用の小水路を造成。
- ②上記の発展形として、5~10m 四方のミニ田んぼを数ヶ所造成予定(1月)。
- ③さらに上記の発展形として、5~10a の区画を造成。
- ④湿地内水路壁をツルハシとスコップでなだらかにすることに着手。

現在のところ、これらの効果はまだ明確には出ていません。



餌場用に囲いを作る

生態系づくりは土づくりから

私たちが早くコウノリの餌場にしていきたいと焦っていたら、外部から2つの指摘をいただきました。曰く、「湿地の周囲=戸島の田んぼ全域が圃場整備で大工事された直後なのだから、生物が姿を消したのは当たり前だ。復活には数年はかかる」なるほど、自然生態系は湿地内だけで独立して成立するものではない。また曰く、「田んぼの表土を剥ぎ取り、ブルが動き回ったのだから、湿地内の土が固く劣化している。土中に微生物がたくさんいるようにしなければ」これもなるほどそうだ。コウノリは魚を食べるが、魚は餌がいなければ住めないし、

その餌生物はその餌がいなければ住めない。いつも生態系ピラミッドが大事と言っておきながら、焦るために頂点の「コウノリが食べる」という観点だけで考えていた。反省し、早速、11月下旬に農家に依頼し約30aを湿地用トラクターで耕してもらいました。



トラクターで耕運する

オープン初年度で見えてきたものの一つは、現在の広い一面の湿地よりも、5~10a区画の畦に囲まれた田んぼ状に区分けした方が、良好な採餌環境が創出でき、草刈りなどの管理もしやすい、というものです。草などの場外搬出が容易な道があればなお Good です。今後、可能な限り浅瀬のフラット状態を凸凹にすることと併行して、少しずつ区割りを進めていきたいと考えています。

結局、コウノリの餌場となる湿地の管理は、田んぼを管理することと基本的に同じだと言えそうです。

ともかく、全てが試行錯誤で挑戦です。もちろん、湿地を機能させるには、このようなアプローチ以前に日常的な淡水の流入と樋門管理・そのための地域との連絡調整、水位のチェックと起伏ゲートの調整などなどを、細やかにやっていかねばなりません。一つひとつが歯車となって大きな湿地が機能します。ここでは、挑戦中の一部を簡単に触れましたが、年度末には詳細な取組み報告をまとめたいと思います。

個体の数が増え当たり前の風景になった落とし穴

私たちがハチゴロウの戸島湿地で餌場づくりに悪戦苦闘しているのを横目に、野外で暮らすコウノトリたちは、さまざまな顔を見せながら飛び回っています。今や、車で走れば、ほぼ確実に市内のどこかでコウノトリに出会うことができ、「豊岡盆地にすることが普通のこと」になっているようです。この状態が、市内外から「コウノトリ野生復帰が順調に進んで成功を取めている」との評価を得ている証左にもなっています。



円山川でアユの奪い合い

このことは、どう考えたらいいんでしょう？「湿地ネットが心配しなくても、餌生物はしっかりいるんじゃないの」「鳥はたくましいので、田んぼの時期が終われば川に移動するし、自分で餌がいる場所を探していく。現に、昨秋は落ち鮎の場所に集中したし」あちこちから聞こえてくるこれらの声は、私たちに一定の混乱を与えてくれます。「本当に、頑張っただけで湿地をつくる必要があるんだよね？」

改めて、主張したいと思います。①戦後、大規模に改変され壊されてきた水辺環境は、まだ回復に至っていません。②採餌環境の再生・維持には、常に生きものを育む方法での管理が必要だが、まだ農業の一部しか成果が見えていません。③約20羽の個体は、依然として恒常的給餌に頼っています。④だから、市内に拠点餌場を意図的に点在させ、生物多様性・採餌環境の創出と維持管理のノウハウを蓄積しなければなりません。そうすることが、豊岡の自然を将来にわたって「コウノトリにいくら食べられてもビクともしない」強固なものにしている道です。やはり、揺るがずに湿地づくりを続け

たいと思います。

苦勞して得た結果が感動を呼び、その過程が誇りにつながる

コウノトリ保護活動とは、コウノトリに愛情を持って接することであり、野生復帰の核心は、壊された環境(自然・文化)を再生することです。その観点から、現在の「早くもコウノトリが普通にいるようになった」光景を見ると、私にはどうもしっくりとこないのです。野生復帰計画の当初、取組みの終着点を「貴重だから特別に保護すべき鳥」から「地域に溶け込み普通の鳥になること」に置かれていました。では、今日の状況が既に目標を達成した姿なのか？と問われると、「そうだ」とは言えないからです。

市民の意識はどのようなのでしょうか？ 2002年にハチゴロウがやってきたとき、2005年に初めて放鳥されたときの驚きと感動は昔の出来事となり、子どもも大人も騒ぐことはありません。コウノトリ野生復帰は、一種のブームのような、そんな薄っぺらなものではないはずです。そして、誰かがお膳立てをしてくれた事象を、自分は何もせず第三者的に眺めるのでは感動も誇りもありようがありません。現場で子どもも大人も汗を流して取組み、挫折しながらやり抜いたその成果としてコウノトリが舞い降りる、そのプロセスにこそ意義があり、コウノトリとのつきあいが本物になるのではないのでしょうか。

その意味でも、ハチゴロウの戸島湿地は最高の学習・実践の場であると自負しています。今年、一人でも多くの方々の参加を得て、湿地づくりの輪が広がることを願っています。



湿地作りボランティアの川嶋建設の皆様

ハチゴロウの戸島湿地と給餌

給餌の必要のない自然環境の実現を目指す

放鳥コウノリたちはコウノリの郷公園西公開ケージ給餌を上手に利用しながらも、豊岡盆地を中心に行動範囲を広げ繁殖を成し遂げ、確実に「コウノリの野生復帰」は前進している。しかし、コウノリの放鳥から5年目を迎えた現在コウノリ湿地ネットが目指す自然環境はまだ豊岡に実現していない。コウノリたちが人間の給餌を利用しなくてもいいほど「命」があふれる豊岡は実現していない。まだ人間の努力が足りない。

戸島巣塔とコウノリ

一昨年昨年とコウノリJ0294・J0391ペアは戸島人工巣塔で計5羽を巣立たせた。その際コウノリ湿地ネットは繁殖の成功と定着のために給餌を実施してきた。昨年5月戸島巣塔がJ0384・J0389の襲撃を受けてヒナ1羽が死ぬというアクシデントがあったが、巣立ちした幼鳥はすぐに親鳥から離れ自活しただけでなく、西日本各地へと出かけ、私たちを驚かせた。しかし親鳥も繁殖期を終えると戸島巣塔を離れ、コウノリの郷公園西公開ケージ給餌を利用して次の繁殖期まで玄武洞より下流域を利用しようとせず、円山川下流域おけるコウノリ通年定着は実現していない。

ハチゴロウの戸島湿地とコウノリ

一昨年4月オープンした「ハチゴロウの戸島湿地」(以下戸島湿地)にコウノリの定着を期待したが6月中旬以降繁殖期を終えたJ0294・J0391ペアは南に去り、時たま訪れる程度での利用でしかなかった。繁殖期が終わってコウノリの姿が見えない日々が続くなかでも、コウノリ舞い降りる湿地をつくるため湿地をおおうキシウスズメノヒエ(外来種)・ガマの駆除に汗を流し、生き物の種類と量を調べる調査を実施してきた。その結果、戸島湿地がコウノリの採餌場所として十分に機能していな

コウノリ湿地ネット会員 宮村良雄

いことが明らかになってきた。

結論としては、戸島湿地を「コウノリ舞い降りる湿地」としてつくっていく作業が必要で、その過程で得られた技術や知識がこれからの豊岡での自然環境への取組みに必要なのだということである。

戸島湿地のオープンは、湿地の完成でなく新たな試行錯誤の始まりだったといえる。そしてコウノリ湿地ネットがその一端を積極的に担いたいと考えている。



戸島湿地内へ遡上してきたいっばいの魚たち

J0294・J0391 ペアは今年10月末ころから時々戸島湿地に姿を現すようになり、城崎町上山円山川左岸にあるクレーンで別のコウノリが縄張り内に入ってくることを激しく妨害している。このことは次の繁殖期が近づいたので同ペアが戸島湿地を重要な繁殖地として意識していることを示すものと思われる。しかし同ペアはコウノリの郷公園西公開ケージの給餌を利用しても戸島湿地での採餌はほとんどできていない。

戦いの始まりとコウノリ

夏から秋の終わりまでたくさんのボランティアの協力を得て、コウノリが採餌できる環境をつくるためのいくつかの作業をやってきた。その結果、湿地が草で完全に覆われることはなかった。しかし前述したように試行錯誤は始まったばかりである。これ

から何倍もの労働力と資金が必要となり、長い戦いを覚悟しなければならない。行政・研究者の協力は当然のこととして、市民・各種団体(企業等)等の直接参加とネットワーク構築が極めて重要になるであろう。

しかしどんなに重要で意義ある取組みも長期間にわたって初期の高揚感を持続させることは困難である。経済的利潤を生み出さない湿地作業はなおさらである。そんな人間の気持ちを支えてくれるひとつがコウノトリの存在である。コウノトリの力をおおいに借りながら取組みを進めていきたいと考える。



復建調査設計ボランティアグループによる竹切作業

戸島湿地と給餌

戸島湿地をコウノトリが利用してくれることが何よ

りも励みになる。コウノトリは私たちの応援団である。

J0294・J0391 が、縄張りを強く意識した行動をしながら、採餌はコウノトリの郷公園西公開ケージの給餌をもっぱら利用している状況が認められる。このことは豊岡の自然環境の現状を一定反映しているものと考えられる。

コウノトリへの給餌については様々な意見が存在し、今後も議論がおこなわれていくであろう。無原則恒常的な給餌でない目的意識的給餌は「コウノトリ野生復帰」の現状において一定の手段として許されるのではなかろうか。刻々変化をするコウノトリたちの状況のなかで給餌の方法・量・期間など常に議論を深めなければならないことはいうまでもない。鳥にも人にもできるだけ負担が少なく済む技術や知識の確立を急がなければならない。

今後の具体的給餌内容についてはできるだけ速やかに報告をしなければならなし、ともに議論を深めていきたいと考える。「継続する給餌」だけでも多くのエネルギーを必要とし、「コウノトリ舞い降りる」湿地づくりには膨大なエネルギーが必要である。

いずれにしても、今まで以上に諸団体の理解と協力が必要となり、コウノトリ湿地ネット会員には新たな負担をお願いしなければならない。

携帯でのコウノトリ目撃網をつくっています。情報が多い日もあれば、2~3件の日も。

でも、1日として休むことはありません。皆さんも参加されませんか？

2010年01月01日 コウノトリ目撃情報

皆さん、明けましておめでとうございます。さて、本日の目撃情報。

11:36 14羽が円山川右岸浅瀬でたたずむ。堀川橋上流

(Mさん 20100101 六地藏・堀川橋上流)

14:38 袴狭川沿いの道路にJ0013が佇んでいる。袴狭川でJ0014・J0363・J0428の3羽が採餌中。

(Hさん 20100101 14:43 袴狭の雪道 20100101 14:50 残り柿)

14:55 J0013が道路を飛び立ち、小野小方面へ。(Hさん 20100101 15:04 雪の袴狭川)

15:32 J0014・J0363・J0428が袴狭川から北の水田に移動する。

(Hさん 20100101 1538 雪に覆われて水田へ)



冬の鳥をたのしもう

(コウノリ湿地ネット会員 早川貞夫)

但馬の冬の天候は変わりやすい。裏西といって晴れていても急に北西の風が吹いて雨や雪が降ってくる。そんな中でも寒い冬なればこそその楽しみもある。

ガン、カモ、ハクチョウ類等水鳥が北国からやってきて、川や池に浮かび、家の庭や畑や公園では、赤い木の実を求めて小鳥たちがすぐ近くまでやってくる。冬は絶好の探鳥シーズンでもある。思い切って外へ出てみよう。その前に、ちょっと鳥のことを知っておこう。楽しさが倍増します。

鳥類は世界で約9000種、日本では約600種が知られている。但馬では250種くらいはいるだろう。円山川下流域では但馬野鳥の会の記録で約100種が知られている。

これらには季節によって見られる鳥と姿を消すものがある。鳥の季節的移動を「渡り」と言い、渡りをする鳥を「渡り鳥」といいます。

これらは大雑把に、「夏鳥」、「冬鳥」、「旅鳥」、「迷鳥」、「留鳥」に分けられます。日本での「夏鳥」は、インドネシア、フィリピン等から春に渡って来て子育てし、秋には南に渡り越冬する鳥で、ツバメ、オオヨシキリ、コチドリ、キビタキ、サシバ等がいる。「旅鳥」は、春、南から日本を通過して北へ、秋は北から南へ飛ぶ、極めて距離の長い渡りをする鳥でシギの仲間が多い。日本では見られない鳥だが、キョクアジサシは、北極で子育てをし、南極まで渡る有名な渡り鳥で、年間4万キロも渡る。「迷鳥」は、本来日本へ来ないはずが、間違ってくる鳥で、コウノリもシベリアから中国揚子江中南部へ渡る途中、日本へ迷い込むもので、迷鳥といえる。

「留鳥」は年中移動しないでいつも見られる鳥で、スズメ、カラス、トビ、カワセミ、アオサギ等おなじみの種が多い。

「冬鳥」今がシーズン。シベリア、サハリン等で子育てし秋日本へ来て越冬する。ガン、カモ、ハクチョウ類など水鳥。ジョウビタキ、ツグミ、カシラダカ、ウ

ソ等の小鳥。ノスリ、チュウヒ等タカ類が来ます。



戸島湿地近くでよく見られるカモには、「マガモ」。

大きくて首から上が緑色でたくさんいてカモの代名詞になっている。これとアヒルの雑種が合鴨でマガモそっくりだ。池にいて人が近づくと逃げるのはマガモ、逃げないのは合鴨だ。

「カルガモ」マガモ位で全身茶色っぽく地味だが日本全土で子育てする。ヒナを連れて泳ぐ姿がメディアによく取り上げられおなじみのカモだ。この辺でも家族単位でいるが、冬は100、200羽と群れている。カルガモ、マガモ共ガアガアとよく鳴く。



「コガモ」一番小さくハトより少し大きい、9月初旬いち早くやって来て5月末までいる。一番数が多く、先日戸島湿地で42羽を数えた。ピリッピリッと鳴く。

「ヒドリガモ」灰色っぽくて、首から上が茶褐色で頭の上に黄色い線がある中型のカモです。



このあたりでは以上4種で大半をしめている。



「オシドリ」ご存知の様に美しいカモ、この冬楽々浦湾にも20羽ほどきたが今はみえない。

近くの谷川で子育てをするものもいる。45年前三川権現大祭の日、三川区の

手前で陽の光でキラキラ輝く棚田によりそうオシドリのつがいを見た時の美しさは忘れられない光景だった。

この他ハシビロガモ、オナガガモ、ホシハジロ等、近年銃獵禁止となった円山川で多くのカモをみる様になった。

ちなみに円山川ではカモ類約20種の記録があり、但馬ではカルガモとオシドリが子育てをしている。

マガン、コハクチョウもよく渡ってくるが居心地が悪いのか居付いてくれなかった。近年六方に湛水田ができたお陰でコハクチョウは毎年越冬する様になった。昨年も12月2日には6羽が滞在している。美しい姿を冬中ながめたいものだ。

書き出すときりがないので、身近な冬鳥1種を紹介

介して終わりにする。



「ジョウビタキ」スズメより小さく、♂は頭が銀白色、腹は赤茶色でヒツヒツと切って鳴く。♀は全身茶色ぼく、どちらも翼の白斑が目立つ。一羽でなわばりを持ち同じ所にいるので見付けやすい。

円山川下流域だけで、今いると思われる鳥は70種、見る気、聞く気で外へ出ると、季節はずれに咲く野草、早くも春に向って大きくなった冬芽をつけた木々等にも会える。さあ暖かくして屋外へ出よう、そしてにぎやかなカモと共に自然の美しさ、きびしさを実感しましょう。



カワセミ (♀)



ヒシクイ



アオサギ



カルガモ

戸島湿地の野鳥たち

湿地再生調査 VOL. 2



奥小野湿地の湿地調査票

湿地名称

奥小野地区ビオトープ水田

所在地

豊岡市出石町奥小野

面積(合計)

10.29アール

構造的特长

六方川と馬場川の合流地点の棚田の一角にある。

開始時期

2009年

湿地周囲の環境

六方川の傍。周りは酒米フクノハナの田んぼ。

動機

台風23号により、六方川の土砂が水田に入り調整水田にしていたが、豊岡市の方から水田ビオトープにと依頼があり始めた。

目的

コウノリの餌場としてのビオトープづくり

管理者

加藤治重

人数(構成メンバー)

1名

水管理

水は馬場川から水路を通じて入ってくる。畝を残して水を張っている。

耕運等

耕運機により春2回、秋1回耕運する。

コウノリの飛来状況

1年を通して2羽が飛来している。

当事者の感想

コウノリが飛来してくるので嬉しい。子供達との生きもの調査が出来るので、楽しい

周囲の感想

コウノリの飛来は喜んでおられる。カメラマンの人が多く、地区では歓迎している

困っていること

水の管理に困っている。秋～冬にかけては水門が閉まってしまうので水がはいってこない。自分のところに水を入れようと思ったら一番下なので、水門を開けたらよその田んぼに入って迷惑になる。回りは酒米フクノハナの種場なので、気を使う。

今後の方向

水源の確保。地区の中はあと2人が取り組んでいる。それぞれの田んぼの管理のしかたを相談しながら進めたい。





野上湿地の湿地調査票

湿地名称

特になし

所在地

豊岡市野上中尾ヶ鼻

面積(合計)

全体は約80アール(1番下方に当たる田んぼ、15, 24アールが、朝日農事分)

構造的特长

保護増殖センター前の棚田風水田、谷あいにある

開始時期

2003年

湿地周囲の環境

南北が山で東に増殖センターが位置し、西に開けた田んぼ

動機

市からの行政指導をきっかけに。(有害鳥獣が多く、水田への被害が多かったため、米は作っていない)

目的

コウノリの餌場として機能することを期待して。

管理者

(有)朝日農事 代表 峠 勉
6枚の田んぼの内、1枚を管理。(後は3~4人の個人が管理している)

人数(構成メンバー)

会社組織としてそれに属する3名

水管理

水路が低い位置にあるため、水路からの取水が難しい。雨がふったときにその水をもれないように確保する。1番上の田んぼに水をいれ、かけ流す方法も取る

耕運等

年1回ほど耕運する。土壌がやわらかく、キャタピラでも困難

コウノリの飛来状況

いろんなコウノリが飛来。産卵してからは、野上ペアのテリトリーとなる

当事者の感想

コウノリがえさを食べにきている

周囲の感想

ビオトープに対する関心が地区にあまりない。野上地区全体に飛来しているので、特にビオトープが注目されない

困っていること

水の管理が難しい。水が漏れる。あぜの管理、水の取り込み、保水も大変

今後の方向

水源の確保が重要





加陽湿地の湿地調査票

湿地名称

東浦ビオトープ

所在地

豊岡市加陽字東浦

面積(合計)

4,99ヘクタール

構造的特长

出石川の堤外田(元桑畑だった)

開始時期

2004年(台風23号の後から。復旧事業を契機として。)

湿地周囲の環境

東側が河川、西側が山

動機

1994年から休耕田対策地になり、1996年、「水鳥公園構想」が持ち上がる。その後、台風23号をきっかけに、水田の転作としてビオトープにした。

目的

1960年の写真の光景(人と、コウノリと、牛が共存している)を取り戻したい

管理者

東浦水利組合 (代表 野澤修)

人数(構成メンバー)

82戸 (毎日の管理は元役員4名で行う)

水管理

ポンプアップして、水を入れる。年間約35~36

万の費用がかかる。人件費は約6万/月

耕運等

春と秋の年2回耕運(一昨年)昨年は無し

コウノリの飛来状況

2005年ビオトープにJ0363が飛来。その後、伊豆のペアなど、複数の個体が飛来。田植え後、5月~7月中旬はあまり飛来無し。稲刈り後から11月の間も、飛来が少ない。(水が張られた時期は水田に、稲刈り後は、そこで昆虫をとっているのではないか)

当事者の感想

やってよかった!コウノリがやってきた。それに伴い、注目されて見学者も増えた。

周囲の感想

地元のコウノリファンが増えた

困っていること

現在国土交通省の土地買収が完了し、これからどうなるのかわからない。

どのような関係を持つことができるのかが問題。

今後の方向

水利組合としては、まだ決まっていない。国土交通省との関係が決まらないので動くことができない。現在は市から委託を受け、暫定管理中(1年契約)

今後のことを考え、水利組合は解散しないで、維持している。





福井新聞コウノトリ支局を訪問しました

(コウノトリ湿地ネット会員 西村英子)

平成21年12月6日(日)、有志で福井県へ日帰り研修?懇親旅行へ行ってきました。6時半ごろ、2台の車に分乗して2ルートで出発。綾部パーキングで合流して、一路、福井を目指しました。途中天候は曇りでしたが、越前市(旧武生市を含む)に入ったところから雨になり、迎えを受けて福井新聞コウノトリ支局へついた頃には、あられ混じりとなり、寒い一日でした。

支局は堂々たる古民家で、内部には囲炉裏があり、新聞記事のパネル展示もありました。

支局開設の経緯は、環境問題がクローズアップされる今日、新聞が果たす役割は何か?話を聞いて読者に伝えることだけなのか?実践できることはないのかと考え、福井の特色を生かす方法として、『田舎がしっかり残ること』をテーマに掲げたことに始まるそうです。コウノトリを呼び戻そうとしているメンバーと知り合い、それを福井県全体の思いにしたいと考えて、記者自身も体験して読者に伝えるために、白山地区に古民家を借り受けて支局を開設したそうです。環境問題なので、1年で終えず複数年で取り組む心積もりとのこと。

ということで記者1名が住み込んでいますが、なんと、夜になると屋根裏で、野生化したアライグマが運動会をするそうです。

農政にかかわる元県職の林武雄さんから、里山活性事業についての説明がありました。①生き物の住める環境整備 ②子供たちを参加させる活動 ③都会の人たちの関心を取り込む ④活動を継続するために農家が儲かる方法を考える。の4点を柱にして、豊岡の取り組みを大いに参考にしたいと期待しておられます。

エコビレッジ農業センターの野村さ





ん・長谷川さんからは、環境整備を目指す取り組みについて紹介があり、コウノトリ呼び戻す農法の恒本さん・稲葉さんからは昨年からはじめた農法の収量が8俵から5俵に減ったそうで、家族の理解を得るのも大きな問題との話がありました。2年目の今年の取り組みに期待したいところです。

林さんからは、古く坂本兵庫県知事、豊岡市の松本助役時代の付き合いから、J0296の飛来したときのことまで、コウノトリについて、その生息環境についての話を伺いました。豊岡と同様に、この地区一帯も、じり田だったそうです。

この地で保護された『武生』への思いは今も強く、小学生が手作りで建てた像は、年を経て建て直されていましたが、姿は当時のままに、人々の気持ちが伝わる姿でした。コウノトリ

育む農法ならぬ、コウノトリ呼び戻す農法に取り組み、コウノトリを迎えたいとの熱い思いを持つ皆さんが、周囲を巻き込む行動を起こしています。豊岡に親近感を抱き、教えてほしいと期待をしておられます。収穫されたお米のおにぎりや赤飯、豚汁を頂き、温かいもてなしでした。「坂本地区へ行ってみてくれ、と伝えてほしい」、放鳥コウノトリへの伝言を頼まれて、帰路へ着きました。さあ、湿地ネットのみなさん、元気を出さなくては！



出版のお知らせ



『おかえりコウノトリ』
佐竹節夫著
(コウノトリ湿地ネット副代表)
童心社
湿地ネット管理棟にも置いてあります。

本書は、いったんは絶滅してしまったコウノトリを再び野生に戻すという偉業をみごと成し遂げた兵庫県豊岡市からの『吉報』です。生物多様性危機の今日、この成功譚ほど自然に想いを寄せる人々に勇気を与える朗報はありません。コウノトリが餌を捕ることのできる湿地を再生しネットワーク化することは、湿地を好む多くの動植物が暮らす場を取り戻すことにつながります。それは、かつて『秋津洲豊葦原瑞穂の国』としてみずみずしい自然を誇っていた日本での、自然再生のお手本ともいえる実践なのです。いきいきとした写真と実体験に裏付けられた確かな「語り口」で、いま豊岡の地で進む世界的にもまれなすばらしい取り組みをわかりやすく紹介してくれます。

鷺谷いづみ教授
(東京大学大学院農学生命科学研究科)の推薦文より



(ハチゴロウの戸島湿地管理棟 森 薫)

11月～12月編

<コウノリの様子>

11月15日からコウノリ(戸島ペアの雄 J0391)が巣塔に止まるようになりました。目撃情報によると、雌のコウノリ(J0294)はひのそ島や、玄武洞辺りにいることが多いです。

管理棟にお越し下さる方の多くは、この湿地で数羽のコウノリが餌を採っているところを見たいと言われるのですが…。

戸島ペアは、ひのそ島より北へ飛んでくる他のコウノリを追い掛け回して、戸島湿地へは絶対に降りさせまいとしています。

11月20日には、巣塔で交尾？らしき行動も見られ、12月14日には巣塔でねぐら入りを確認しました。



<湿地では>

11月は、3社の企業がボランティア作業に来て下さいました。

企業としての「生物多様性からのCO2削減」の取り組み。CSRとして、そして実践、研究の場所として戸島湿地に係わり続けたいと、復建調査設計株式会社の皆さんによる孟宗竹の伐採、川嶋建設株式会社の皆さんによる湿地淡水域での区画作り、円山川漁業協同組合より定置網を借用し外来種駆除作業と126名の方に参加していただきました。

<環境学習の場所として>

環境学習の場所として戸島湿地を利用していただく機会が増えています。

11月7日には、兵庫県立尼崎小田高等学校サイエンスリサーチ科1年生30名が来られました。2時間弱の滞在時間を有意義に使っていただく為に、内容は下記のように進めました。

1. コウノリが生息できる自然環境の再生について(基本講義)
2. 湿地現場観察
3. 前日に仕掛けて置いた定置網、ブルーギル捕獲網を引き揚げ生きもの調査をする。
4. 生徒によるブルーギル、ヌートリアの捕獲罠の仕掛け(グループに分かれての実践)



定置網を仕掛ける小田高校の生徒たち

総括として、生物多様性喪失の深刻な状況となっている外来種の問題の深刻さを理解し、私達一人ひとりが考えて行動することが何よりも大切だということを学びました。

実際に外来種駆除に係わっていただくことにより、生物多様性向上に貢献出来ると共に、生徒の皆さんが仕掛けたその後の状況をメールで報告し、今後もつながり続けていきたいと思っています。

そして当会佐竹副代表が、兵庫県立豊岡高等学校自然科学系コース1・2年生の、冬休みオーストラリア海外研修へ行かれる事前学習として、11月27日に豊岡高校へ「コウノトリが生息できる自然環境の再生について」の講義に出かけ、受講生から「戸島湿地での作業を手伝いたい」との声があり、12月12日に同コース1・2年生8名が、長靴持参で来て下さいました。

あいにくの雨と、生きものに詳しい、復建調査設計株式会社の若宮班の皆さん、湿地ネットの会員が数名いたこともあり、湿地作業よりも先に議論しようということになり、当会の活動や湿地管理の様子、コウノトリ野生復帰への想いを話していくうちに・・・話し出したら止まりませ～ん。

高校生の皆さんはどのように受け止めてくれたのでしょうか・・・(以下、高校生の言葉)

「活動を続けていくためには、これから僕達のような年代が頑張らないといけないと思うので、少しでも出来ることはしていきたい。湿地でのボランティア活動にも興味がありぜひやってみたい」

「豊岡の取り組みをきっかけに、他の地域がよくなればさらに良いと思う」

「コウノトリについて興味が湧いてきた。興味をもてるのは、やはり自分の身近でコウノトリが生きているということだと改めて実感した」

「私達人間が破壊してしまった自然は、自分達の手で取り戻すということに、わたしも協力したいと思った」

「ビオトープとは、生きものがその生きものらしく、健康に暮らせる場所だと言うことを学んだ。私達にとってのビオトープがずっと豊岡であればいいなと思いました」

「私の家は農家なので、祖父母はコウノトリ放鳥に苦い顔をしますが、コウノトリとの思い出を尋ねると懐かしそうにたくさん話してくれます。コウノトリの野生復帰と共に、人々の誇りも取り戻したいと本当に思いました」

「自分の家の近くにビオトープがあるので、佐竹さんの話を聞いていてとても興味深かった。コウノトリのことを世界的なこととして捉えているため、英語をマスターして意見を言えるようにしておきたい。豊岡市民として自慢できる場所まで(ラムサール条約に登録など攻めていって欲しい。僕が出来ることがあればぜひ貢献したい) (N君は翌日の湿地再生白書の取材に同行してくれました)」

番外編＝佐竹さんの講義を聞いて＝

「いつも授業中寝る自分だが、集中して話を聞いた」

若い力に、希望と可能性への確信を見つけ嬉しかったです。本当に嬉しい！世代を越え、ガッチリ握手した感じかな。

A君が最後の挨拶のなかで、『この間、僕の曾祖母ちゃんが亡くなって・・・それまでは「別にコウノトリがおらんようになってもええやん」って思っていたけど・・・うまく言えないけど、「やっぱりコウノトリはおらんあかん！」って思うようになりました。オーストラリアから帰ったらまた来ます』と話されました。

私もうまく言えないけど・・・よく分かるな。言葉では表せない気持ちや想いが伝わること。出会いのなかでこれほど嬉しいことはないですね。オーストラリアから帰られたら、ぜひ一緒に作業をしましょう。もっと分かり合うために。新しい年、楽しみにしています。

ブログもご覧ください。戸島湿地便り <http://hachi560.exblog.jp/>



豊岡高校の生徒たち



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

<新規入会>

法人会員

豊岡市 三栄産業株式会社

個人会員

東京都 瀬古智貴 豊岡市 山下秀明

(2009年10月21日～12月25日)

ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。



思うこと

(コウノトリ湿地ネット代表 横田登代子)

寒い季節になってきました。ハチゴロウの戸島湿地の植物達は休眠に入って静かにしています。でも、鳥達は活発に動き回っています。コウノトリも時々やってくるようになり、そろそろテリトリーの確保に取り掛かっているように思えます。



コウノトリの姿があると、ほっとする……。

この一年ハチゴロウの戸島湿地では、草との戦いに苦労した年に思えます。湿地をどうすれば多様性に富んだコウノトリの餌場となる湿地にできるのか、色々な面での問題を投げかけられた一年となりました。これからは、問題を一つ一つ解決し、今年とは違った湿地を作っていけるように頑張りたいと思います。皆様の御理解、ご協力を宜しくお願い致します。

「編集後記」

コウノトリの朝は早い。早朝よりモニターをされているF会員を出勤途中に発見した。寒いのに車の窓は全開にして、コウノトリを観察しながらノートにひかえておられた。彼女の「観察日記」を読むと、風景やコウノトリと人や車の距離までも浮かんでくる。車ですれ違う際、ほんの一瞬に見た彼女の姿は今も瞼の中にあり、放鳥されたコウノトリを見守り、記録し続ける人達は豊岡の財産だと思う。(森)

パタパタが2年目に入りました。この1年はあっという間か、長かったのか？どちらでもありました。今年は少し落ち着いて、取り組みたいです。(宮村)